

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006 年～2008 年
 課題番号：18592459
 研究課題名（和文）認知症高齢者グループホームにおける終末期ケアの研修プログラムの開発
 研究課題名（英文）Development of training program of end of life care with Dementia in Group Home Staff
 研究代表者
 平木 尚美(HIRAKI NAOMI)
 兵庫医療大学・看護学部・講師
 研究者番号：10425093

研究成果の概要：

本研究は、認知症高齢者グループホームで終末期ケアを実施するための研修プログラムの開発を目的とし、終末期ケアのニーズ調査ならびに「認知症高齢者のための終末期」研修会を実施した。その結果、研修会受講は終末期ケアに対する認識の変化は、一時的なものであり、そのことは時間の経過とともに死が現実的になり、[死にゆく患者のケアへの恐怖]の認識がさらに高まっていた。しかし、「家族への配慮」「家族の心理的支援」「家族の役割」の認識については変化を認めず、家族への援助ケアの認識は、日常的に認識されていたと考える。今後、職員の[死にゆく患者のケアへの恐怖]を緩和するために、認知症高齢者グループホームに出向いての3か月以内の継続的な出張研修会の介入や、死の準備教育やグリーフケアなどの死の恐怖に対するケアやサポートが必要である。今後、医療連携における看護職との連携システムの中で、ホームへの出張研修会の実施や職員の精神的サポートを実施していくことが必要である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,800,000	0	1,800,000
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	510,000	4,010,000

研究分野：地域・老年看護学
 科研費の分科・細目：老年看護学

キーワード：認知症高齢者,グループホーム,終末期ケア,研修プログラムの開発

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在の認知症高齢者数は、2005年では推定205万人であり、2035年には445万人に増加すると推測されている。そこで、なじみの関係の中で自立を目指して共同生活を送るといふ認知症対応共同生活介護事業(以下、グループホーム)が1992年より全国各地に新設され、2008年9月30日では9,445か所にまで普及してきた。

(2) 従来、認知症高齢者がグループホームで生活をしていても、病院で看取られることが一般的であったが、昨今リロケーションダメージの軽減やなじみのある場所で尊厳ある最期を迎える場として、グループホームにおける看取りが積極的に期待されている。

(3) 入居時は介護度が比較的軽度であった認知症高齢者が、認知症の進行やがんや慢性疾患の重度化により、グループホームで終末期を迎えた割合は、2005年では14.4%あったと厚生労働省調査から報告されている。また、入居者やその家族の64%がグループホームでの看取りを希望しており、終末期ケアの対応がさらに求められることが予測される。

(4) そこで住み慣れた地域で初期から終末までの継続的な支援という命題においては、「重度化対応」や「看取りへの支援」が避けられない課題となっており、グループホームの職員には認知症に対するケアだけでなく、終末期ケアにおいても重要な役割が求められていると考える。

2. 研究の目的

認知症高齢者グループホームで生活する認知症高齢者の終末期ケアの質の向上をめざして、職員のための研修プログラムを企画・立案し、その有用性について検証する。

3. 研究の方法

(1) 認知症高齢者グループホームにおける終末期ケアの実態とニーズ調査(平成18年度)

①認知症高齢者の人をケアする職員(看護職・介護職・施設管理者)を対象に半構成的面接を実施した。

②近畿圏内の認知症高齢者グループホームに勤務する職員(看護職・介護職・施設管理者)を対象に質問紙調査(郵送留め置き法)を実施した。

③近畿圏内の認知症高齢者ケア施設(特養・老健・認知症治療病棟・認知症高齢者グループホーム)の介護職と看護職を対象に、終末期ケアに関する質問紙調査(郵送留め置き法)を実施した。

④海外の認知症高齢者ケア提供システムの実態視察とケア管理者に聞き取り調査を実施した。

(2) 認知症高齢者グループホームで終末期ケアを実施するための研修プログラムの立案・実施(平成19年度)

①平成18年度に明らかになった終末期ケアのニーズより、大阪府下の認知症高齢者グループホーム職員を対象に、終末期ケア研修会を企画・開催した。受講希望者は、1日目106人・2日目46人を予定した(実際の参加者:1日目87人・2日目36人)。

②受講者には、事前課題レポートにより抱えている課題を確認し、グループワーク構成の参考にした。研修会は連続する2日間(12時間)で、講義とグループワークで構成した。グループワークには、研究者ならびに研究協力者が各グループに1人ファシリテータとして参加した。事後課題レポートと調査票「参加者の属性」「ターミナルケア態度尺

度:FATCOD B-J」配付し，得られたデータを整理した。

(3) 研修会の評価(平成 20 年度)

①研修会実施前後に，実施した課題レポートと調査票「ターミナルケア態度尺度:FATCOD B-J」の受講後 3 か月・受講後 6 か月のデータ収集と非介入群のデータ収集を実施した。

③ 受講後 6 か月に，フォーカスグループ・インタビューを行い，研修会受講後の終末期ケアに対する取り組み状況と研修会の有用性について意見交換を行った。

4. 研究成果

(1) グループホームにおける終末期ケアに対する介護職員の思い「事例検討会を実施した記録の内容分析」

認知症高齢者グループホームの職員を対象に終末期ケアに関する事例検討会を行った記録を質的帰納的に内容分析した。終末期において職員は体力を消耗させないために，日常生活の工夫や，痛みや嘔気からくる苦しみや辛い気持ちに寄り添っていた。また医師や看護師と連携の中で痛みに対するケアの実施が充分ではなかったことの思いが表出された。「本当にグループホームで介護していてよかったのか」，「入院した方が対象者にとって安楽だったのではないか」と葛藤していた。後悔や葛藤より，グループホームの終末期ケアにおける介護者としての無力感や限界を感じていた。事例検討会をすることで他の介護職員の行動や思いを知り，お互いが支え合いながら対象者の辛さに向き合おうとしていたことが伺えた。課題として，同僚や上司，第三者による職員の精神的サポートと終末期ケアに対する研修の必要性が明らかになった。

(2) 認知症高齢者グループホームにおける終末期ケアの実態と課題

グループホーム施設管理者ならびに職員 6 人に終末期ケアに対する考え方をインタビューした。1) 認知症高齢者グループホームの職員は終末期ケアの経験が少なく，不安のある中で最期までその人らしく生きることを見守る姿勢があった。2) 認知症高齢者の終末期ケアに対する課題として，職員の①学習に対するニーズの把握②人員不足③医療者との連携不足④価値観の相違が明らかになり，研修や学習の機会の必要性が示唆された。

(3) 認知症高齢者グループホームにおける終末期ケアの実態と必要な研修プログラム内容の把握

グループホームにおける認知症高齢者に対する終末期ケアの現状の把握と今後の課題ならびに必要な研修プログラム内容を明らかにすることを目的に，近畿圏内 1,062 か所のグループホームに質問紙調査を実施した。回答のあったグループホームは 374 か所(回収率 35.1%)，1,792 人が回答し，その内 484 人は施設管理者であった。終末期ケアの「介護経験がある」は 124 か所(28.0%)であり，終末期ケアに「今後取り組みたいと考えている」は 282 か所(65.0%)であった。終末期ケアを実施するときに必要な援助は，「終末期ケアの知識」1,135 人(66.3%)，「本人や家族の希望を知る」1,110 人(64.7%)，「医療機関との連携」1,069 人(62.3%)が上位であった。設置年数や職員の就業年数および看護師数とケアの経験の有無では，差はあるものの，半数以上でケアの経験がないことがわかった。ケアの経験内容は職種により若干の違いがあり，ヘルパーでは通常の介護業務を，看護師は緩和ケアを実施していることが明らかとなった。グループホームの職員は，終末期における症状の観察などの知識を得て，本人や家族の希望を知り，医療機関との連携を図ることで，終末期ケアに取り組みたいと考えていることが明らかになった。また参加したい研修内容は，緩和ケアに関するものが上位に挙げられていることが判明した。

(4) 認知症高齢者グループホームで終末期ケアを実施するための研修プログラムの立案・実施

平成 18 年度の実態とニーズ調査から認知症高齢者グループホームにおける職員は、終末期ケアを実施するにあたり、事例検討会や研修会を通して学習や情報交換をしたいと考えていることが明らかとなった。そして、学習内容には①認知症終末期の考え方②終末期症状の観察③グループホームでの終末期ケアの実際④苦痛の緩和⑤医療・看護との連携⑥家族への支援⑦事例検討(グループワーク)を盛り込んだ研修会を企画し、2 日間にわたり実施した。

(5) 認知症高齢者の終末期ケア研修会の評価 「研修会受講者への質問紙調査の分析」

認知症高齢者のための終末期ケア研修会(2008 年 2 月 1 日, 2 日実施)を受講したグループホーム職員を対象に、認知症高齢者の終末期ケアに対する認識等を問う調査票を配布した。グループホームにおいて「終末期ケアを提供する必要がある」は受講前の 61.4%から受講後 77.1%に増加し、反対に「必要がない」は 1.4%から 0%へ減少した。また、グループホームにおいて「終末期ケアの実施が可能である」は、受講前の 37.1%から受講後 58.6%に増加し、「無理がある」は 24.3%から 11.4%に減少した。受講前「無理がある」「わからない」と回答した理由に「終末期ケアの経験がない」や「職員体制の不備」を挙げる人が複数見られたが、受講後は「終末期ケアは自分が思うほど難しいものではないと感じた」や「スタッフ等の体制が整えば可能」などの終末期ケアに対して前向きな意見が増していた。研修会の内容では「終末期の定義とグループホームでの終末期の捉え方」の項目で 88.3%の人から「よく理解できた」との回答があった。受講後の意見には「終末期ケアに対する考えを整理できた」「不安が軽減した」「死への考えが変わった」「自信になった」などが挙げられていた。

(6) 認知症高齢者の終末期ケア研修会受講者の課題レポートの内容分析

2008 年 2 月に、終末期ケア研修会に参加した大阪府下のグループホーム職員を対象とし、提出された課題レポートを内容分析した。グループホーム職員は、終末期ケアの必要性を感じながらも、その取り組みについて課題を残していたが、課題達成のための取り組みが具体化されていた。「終末期ケアは入居した時から始まっている」という学びから、今まで行ってきたその人らしい生活を支援していく延長線上に看取りがあることを確認し「終末期ケアの概念の再構築」をしていた。グループホーム職員は、入居時から利用者と家族の希望を聞き、ゴールを共有していくためには「スタッフ間での話し合い」や「人の自然な死について話し合う」ことの必要性を見出すこともできていた。同時に家族支援や医療との連携など取り組むべき具体的な行動目標も明らかになった。今後は認知症の終末期ケアに対するマニュアル化の推進と事例検討会を重ね、継続したグループホーム職員の支援を行っていく。

(7) 認知症高齢者のための「終末期ケア研修会」受講者の終末期ケアに対する認識

終末期ケア研修会の受講者 39 人に対して終末期ケア研修会を実施した研修会介入の評価を実施した。自記式質問紙調査で、調査票は中井¹⁾が作成した「死にゆく患者へのターミナルケア態度尺度日本語版 (Frommelt attitudes toward care of the dying scale: FATCOD, Form B-J)」を使用した。受講前後ともグループホーム職員は、終末期ケアに対して消極的態度がみられた。[死にゆく患者へのケアに価値を見出せない態度]は、受講後に下位に、[サポートする家族ケアへの認識]は受講後に上位となっていた。研修会の介入はグループホーム職員の終末期ケアに対する認識の変化があり、効果

があったことが判明した。

(8)「ターミナルケア態度尺度:FATCOD B-J」の受講後3か月・受講後6か月の変化

(1)受講前の認識：第1因子軸は「自分がケアしてきた患者は自分が不在の時になくなってほしい(.692)」「私は人が実際に亡くなったとき逃げたしたい気持ちになる(.631)」「私は死にゆく患者と親しくなることが怖い(.601)」の[死にゆく患者のケアへの恐怖]で構成されていた。第2因子軸は「死にゆく患者には面会時間の融通をすべき(.818)」「家族もケアの対象にすべきである(.710)」の[家族への配慮の必要性]、第3因子軸は「家族は心理的サポートが必要(.615)」「死にゆく患者が自分の気持ちを言葉に表すことは良いこと(.466)」「家族へのケアは死別や悲観の時期を通して継続されるべ(.445)」の[本人や家族への心理的援助の必要性]で構成されていた。第4因子軸は「死にゆく患者とその家族は意思決定者としての役割を担うべきである(.678)」「家族は死にゆく患者が残された人生を最良に過ごせるように関わるべき(.632)」の[家族の役割]を認識していた。

(2)受講後の認識の変化：受講前・受講後1週間・3か月後・6か月後の4回の認識の変化をみた。受講前の第1因子軸に基づいて算出した因子構造を外挿して、受講後1週間後・3か月後・6か月後の因子得点を計算し、その有意差を反復測定分散分析で検証した。その結果、第1因子軸[死にゆく患者のケアへの恐怖]の認識は、受講1週間後は一時的に下降し、3か月後・6か月後は単調増加しており、経時的に有意なものであった ($p=.023$)。第2因子軸[家族への配慮の必要性]、第3因子軸[本人や家族への心理的援助の必要性]、第4因子軸[家族の役割]の認識はいずれも有意差は認められなかった。

研修会受講は [死にゆく患者のケアへの恐怖]の認識の変化は、一時的なものであり、そのことは時間の経過とともに死が現実的になり、[死にゆく患者のケアへの恐怖]の認識がさらに高まったことを示している。しかし、「家族への配慮」「家族の心理的支援」「家族の役割」の認識については変化を認めず、家族への援助ケアの認識は、日常的に認識されていたと考える。今後、職員の[死にゆく患者のケアへの恐怖]を緩和するために、グループホームに出向いての3か月以内の継続的な出張研修会の介入や、死の準備教育やグリーフケアなどの死の恐怖に対するケアやサポートが必要である。

(9)6か月後のフォーカスグループ・インタビューでは、以下の内容が明らかになった。研修会に1人が受講しても、ホーム全体に浸透しておらず、非常勤職員が多い中で外部の研修会には参加しにくい。

受講後に終末期ケアを実施した職員の課題は「医療との連携」であった。医療連携加算や訪問看護の制度はあっても「実際は使用しにくい・できていない」のが現状である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Naomi,Hiraki,Yoko,Uenishi, Palliative Care for Elderly people with Dementia in Melbourne, Aino Journal Vol6,63-70,2007 査読有

② 平木尚美,大町弥生,認知症高齢者グループホームの終末期ケアに対する介護職員の思い,日本看護福祉学会,13(2),119-131,2008, 査読有

[学会発表] (計15件)

① 平木尚美,認知症高齢者グループホームにおける終末期ケアの実態と課題,第20回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会,園

- 田学園女子大学,p74,2007. 査読有
- ② 平木尚美,認知症高齢者を介護する家族が期待する終末期ケア,第8回日本認知症ケア学会学術集会,盛岡マリオス,p361,2007.
- ③ 須川重光,平木尚美,大町弥生,認知症高齢者グループホームにおける終末期ケアの実態,第8回日本認知症ケア学会学術集会,盛岡マリオス,p351,2007. 査読有
- ④ Naomi Hiraki, Experience and perception of group home staff regarding end-of-life care, Silver Congress of the International Psychogeriatric Association International Psychogeriatrics Vol19(1)2007 14-18, October2007, Osaka, Japan 第22回日本老年精神医学会学術集会(国際老年精神医学会),大阪国際会議場,pp228-229,2007年10月15日. 査読有
- ⑤ 平木尚美,認知症高齢者のための「終末期ケア研修会」受講者の終末期ケアに対する認識－ターミナルケア態度尺度を用いた分析－,第9回日本認知症ケア学会誌 Vol.7(2),p280,2008年9月26日. 査読有
- ⑥ 山田千春,認知症高齢者の終末期ケア研修会の評価-研修会受講者への質問紙調査の分析-,第9回日本認知症ケア学会誌 Vol.7(2),p283,2008年9月26日. 査読有
- ⑦ 廣嶋泰子,認知症高齢者の終末期ケア研修会受講者の課題レポートの内容分析,第9回日本認知症ケア学会誌 Vol.7(2),p444,2008年9月26日. 査読有
- ⑧ 平木尚美,大町弥生:認知症高齢者グループホームで終末期ケアを実施するための一考察 -終末期ケア研修会の受講生の課題レポートの内容分析-,第13回日本老年看護学術集会抄録集,石川県音楽堂,p235,2008年11月9日. 査読有
- ⑨ Naomi Hiraki, Training Program for Japanese Group Home Staffs dealing with End-of-Life Care, 24th Conference of Alzheimer's Disease

International, Suntec Singapor 2009年3月26日. 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平木 尚美(HIRAKI NAOMI)
兵庫医療大学・看護学部・講師
研究者番号:10425093

(2) 研究分担者

大町 弥生(OHMACHI YAYOI)
兵庫医療大学・看護学部・教授
研究者番号:90269770

辻村 史子(TSUJIMURA FUMIKO)

藍野大学・保健医療学部・教授

研究者番号:20299829

上西 洋子(UENISHI YOKO)

大阪市立大学大学院・看護学研究科・准教授

研究者番号:30310741

(3) 連携研究者

板東 正己(BANDOU MASAMI)

太成学院大学・看護学部・助手

研究者番号:30460968

廣嶋 泰子

兵庫医療大学・看護学部・助手

研究者番号:70510866

山田 千春

兵庫医療大学・看護学部・助手

研究者番号:00510869